

Title	「陳衡哲著訳目録」付解説および史料補遺
Sub Title	Catalogue about Chen Hengzhe, consisting of her works with explanations and recently unearthed material
Author	櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.8 (2015.) ,p.106(45)- 150(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20150331-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「陳衡哲著訳目録」付解題 および史料補遺

櫻庭 ゆ み 子

「陳衡哲著訳目録」凡例

- 一、この「陳衡哲著訳目録」は、書簡^①を除く陳衡哲（1890-1976）の翻訳、著作について、刊行物に公表されたものを現時点でわかる限り収めたものである。
- 二、単行本は『 』で、短編は「 」で、英文タイトルについて単行本はイタリックで、短編は“ ”で示した。
- 三、刊行物の刊行年月日がわかるものは、巻・号数のあとにわかる範囲で記した。
- 四、署名は、「陳衡哲」以外のものを題名の後に示した。
- 五、小説、翻訳、書評については題名の後にその別を記し、詩については、旧体詩と白話詩（「旧体詩」以外の詩）の別をそれぞれ記した。その他必要に応じて説明をほどこした。
- 六、配列は刊行物に公表された順である。再版があるものは初版を収め、必要に応じて説明を加えてある。
- 七、目録作成者未見のものは、未見と記している。ただし以下にあげた「大成老旧刊全文データベース」及び影印版の雑誌で内容を確認したものは未見としなかった。
- 八、目録作成の際に参考としたデータベース、雑誌、単行本、論文は主に以下の通りである。目録の中で*の後に番号がついている場合、その番号は以下に準じる。

①「大成老旧刊全文データベース」②胡適等主編『独立評論』（岳麓出版社、1999年。10巻。中国近代期刊影印叢刊；3）③胡適主編『努力週報』

(岳麓出版社、1999年。中国近代期刊影印叢刊；2) ④儲安平主編『觀察』(岳麓出版社、1999年。6卷。中国近代期間影印叢刊；1) ⑤『新青年』(新青年雜誌社、影印版、東京：汲古書院) ⑥留美中國學生會『留美學生季報』(中華書局、1914～1917年。商務院書館、1917～1928年)⁽²⁾ ⑦ *Vassar Miscellany Monthly*, Special Collections, Vassar College Libraries. 所蔵の作品の収録状況は目録のそれぞれの箇所参照。⑧ *The Chinese Students' Monthly*.⁽³⁾ ⑨趙慧芝「陳衡哲年表」、搶救民間家書項目組委會編『任鴻雋陳衡哲家書』北京：商務院書館、2007年。⑩『中國現代小品經典 衡哲散文集』、華北教育出版社、1994年。⑪『中国現代文学史参考資料 陳衡哲著 小雨点』、上海書店、1985年。⑫陳衡哲『歐洲文藝復興小史』、商務院書館、第2版、1934年。⑬陳衡哲『文藝復興小史』、商務院書館、1926年。⑭陳衡哲『西洋史』、上海：商務院書館、1924年。⑮Chen Zen, Sophia H. *The Symposium on Chinese Culture*. Shanghai: Institute of Pacific Relations, 1937. ⑯Chen Zen, Sophia H. *The Chinese Woman and Four Other Essays*. 2ed edition. China: 1934. ⑰耿雲志主編『胡適遺稿及秘藏書』影印本、第36冊、黃山書社、1994年。⑱陳學勇主編、史建國著『陳衡哲伝“造命”人生的歌者』、上海遠東出版社、2010年。⑲史建國「『陳衡哲年表』正誤」『魯迅研究月刊』2013年第2期、「関与陳衡哲的几点史料辨正」『民国档案』2010年第2期。

九、資料収集に当たっては、Special collections, Vassar college Libraries、中国国家図書館、北京大学図書館、慶應義塾大学メディアセンターを利用した。ここで改めて各機関に感謝の意を表したい。Special Collections, Vassar College Libraries のDean Rogers氏には、貴重な資料の撮影及び論文での使用許可をはじめ、こちらの要望に親切に対応していただいた。中国国家図書館の呉京生氏には『留美学生季報』掲載の陳衡哲の作品を取り寄せ複写する労を執っていただいた。この場を借りて心からお礼を申し上げたい。尚、目録作成に当たって、慶應義塾学事振興資金による研究補助を受けている。

陳衡哲著訳目録

「改暦法議」翻訳 女士陳衡哲

1912年 8 月『東方雜誌』第 9 卷第 2 号（1912年 8 月 1 日）掲載。

『大陸報』（*China Press*）に掲載された「哈司根」の文章の中文訳。

著者及び英文表題未詳。

「致某女士書」

1915年 3 月『留美學生季報』（第 2 卷第 1 号）掲載。

「来因女士小傳」

1915年 2 月執筆。1915年 9 月『留美學生季報』（第 2 卷第 3 号）、

1915年 9 月『科学』（第 1 卷第 9 期）掲載。後者は編者の解説付き。

「記藩薩女子大學」

1916年 3 月『留美學生季報』（第 3 卷第 1 号）掲載。

「永久之和平果可期乎」翻訳

1916年 9 月『留美學生季報』（第 3 卷第 3 号）掲載。Bertrand Russell. “Is a Permanent Peace Possible?” *The Atlantic Monthly* (March, 1915): 367-376からの抄訳。

“A Glimpse of Chinese Poetry.”

Vassar Miscellany Monthly (November, 1916): 11-15.

“Club News: Vassar.”

The Chinese Students Monthly (November, 1916): 437. Vassar での近況報告⁽⁴⁾。

「東美中國學生年會記事」

1916年12月『留美學生季報』（第 3 卷第 4 号）掲載。陳衡哲は學生會の中文書記に選出されている。

“Translation from Two Verses in Chinese.”

Vassar Miscellany Monthly (January, 1917): 96

「平和與争戦」

1917年 3 月『留美學生季報』（第 3 卷第 4 号）掲載。

「記某軍官之言」

1917年6月『留美學生季報』（第4卷第2号）掲載。

「西風」旧体詩

1917年6月『留美學生季報』（第4卷第2号）掲載。

「寒月」旧体詩

1917年6月『留美學生季報』（第4卷第2号）掲載。

「一日」白話体小説

1917年6月『留美學生季報』（第4卷第2号）掲載。陳衡哲初の
白話文体小説の試み。

「説行星軌道」翻訳。

1917年7月『科学』（第3卷第7期）掲載。

「召夕列」旧体詩

1918年『留美學生季報』（第5卷第2号）掲載。＊目録のみ確認。

「記藩薩火災」

1918年『留美學生季報』（第5卷第2号）掲載。

“The Early Chinese Poetry.”

Vassar Miscellany Monthly (July 1918). Alumni, Zen, 1919.
Special Collections, Vassar College Libraries.

「夕照山暮望」旧体詩

1918年9月『留美學生季報』（第5卷第3号）掲載。

「人家說我發了癡」白話詩

1918年『新青年』第5卷第3号（1918年9月15日）掲載。

「老夫妻」小説

1918年『新青年』第5卷第4号（1918年10月15日）掲載。

「記新大陸之村中生活」

1918年3月『婦女雜誌』（第4卷第3号）掲載。

「松樓雜記」読書笥記

1919年3月『留美學生季報』（第6卷第1号）掲載。

「鳥」白話詩

1919年5月『新青年』（第6巻第5号）掲載。

「散伍婦来的『吉普色』」白話詩。

1919年5月『新青年』（第6巻第5号）掲載。

「加拿大堪蒲記」

1919年9月執筆。『留美學生季報』（1920年春季第1号）掲載。オンタリオ州北部のDeer Lakeで撮った6枚の白黒写真付き。

のち『衡哲散文集』（開明書店、1938年）に「加拿大露營記」と改題して収録。

“THE INTERCOURSE BETWEEN CHINA AND THE WEST IN ANCIENT AND MEDIAEVAL TIMES” (221B.C-1367A.D)

1919年執筆。（シカゴ大学図書館所蔵）修士論文。

「小雨点」短編小説

1920年『新青年』第8巻第1号（1920年9月1日）掲載。『小雨点』（新月書店、1928年）収録。

「波児」短編小説

1920年『新青年』第8巻第2号（1920年10月10日）掲載。『小雨点』（新月書店、1928年）収録。『小雨点』序によると1918年執筆。

「送給素斐」白話詩

1921年11月7日作。胡適の長女に送った詩。*⑰9-40頁。

「暮色」、「早起好一景」白話詩

1921年12月14日作。*⑰45-46頁。

「巫峡裏的一個女子」短編小説

1922年8月『努力週報』第15期（1922年8月13日）掲載。『小雨点』（新月書店、1928年）収録。

「關於『努力』本身的一個問題」

1922年8月『努力週報』第15期（1922年8月13日）掲載。「基督教在欧洲历史上的位置」を掲載したことに対して、政治を語るべき『努力週報』に掲載すべきではないという批判があり、それに対する反論。重慶にて執筆。

「紀念但丁」

1921年9月執筆。のち『衡哲散文集』収録。

「中欧交通史目錄」

1922年5月『史地學報』（第1卷第3期）掲載。

「基督教在欧洲历史上的位置」

1922年4月13日執筆。1922年『努力週報』第1期（1922年5月7日）、『東方雜誌』第19卷第10号（1922年6月10日）掲載。「基督教在欧洲历史上的位置（續）」とあわせて『衡哲散文集』収録。

「基督教在欧洲历史上的位置（續）」

1922年『努力週報』第2期（1922年5月14日）掲載。

「四川為什麼糟到這個地步？」

1922年6月27日重慶にて執筆。1922年『努力週報』第12期（1922年7月23日）掲載。

「孟哥哥」短編小説

1922年『努力週報』第23期（1922年10月15日）掲載。『小雨点』（新月書店、1928年）収録。

「三峡中的揚子江」白話詩

1922年『努力週報』第30期（1922年11月26日）掲載。

「夢與希望」白話詩

1922年『努力週報』第32期（1922年12月10日）掲載。

「綺琴文化」

1922年11月1日重慶にて執筆。『讀書雜誌』（1922年12月3日）掲載。

「美國女子的大学教育」

1922年12月執筆。1923年1月『教育雜誌』第15卷第1号（1923年1月20日）掲載。『衡哲散文集』収録。

「吃先生的日記」（抄録）短編小説

1923年『努力週報』第42期（1923年3月4日）掲載。

「一个女尼的懺悔」白話詩

1923年 胡適への書簡。＊①782頁。

「桃花和晚霞」白話詩？ 未見。

1923年 胡適への書簡。＊①782頁に言及あり。所在は不明。

「私的心」訳詩 署名 叔永 沙菲

1923年『努力週報』（第43期（1923年3月11日）掲載。“My heart is heavy”（サラ・ティーズデールの詩）を任鴻雋と共同で白話詩に訳したもの。

「『完全不是那麼一回事』」署名 哲

1923年『努力週報』第52期（1923年5月13日）掲載。

「晚上的西湖」白話詩

1923年5月2日執筆。『努力週報』第58期（1923年6月24日出版）掲載。

「研究歷史應具的常識」

1923年6月『努力週報』（副刊第10期）、『讀書雜誌』第10期（1923年6月10日）掲載。

「讀書隨筆」

1923年6月『努力週報』（副刊第10期）、『讀書雜誌』第10期（1923年6月10日）掲載。

「介紹英國詩人格布生」

1923年『東方雜誌』第20卷第7号（1923年4月10日）掲載。

Wilfrid Wilson Gibson の詩の翻訳紹介。「英詩人格布生的詩」として『衡哲散文集』収録。

「題風景冊」「晚景一則」白話詩

1923年『努力週報』第63期（1923年7月29日）掲載。

「我要去了」白話詩。

1923年8月『努力週報』第66期（1923年8月19日）掲載。附序。

「『大國民』的外交」署名 S. C.

1923年『努力週報』第70期（1923年9月16日）掲載。

「對於今後日本的一個希望」

1923年『努力週報』（1923年9月30日）掲載。

“Miss Ellery’s Visit to China.”

Vassar Miscellany Monthly (November 1923): 1-4. Special Collections, Vassar College Libraries.

「彼述克」

1923年11月上海にて執筆。1923年12月『晨报五周年紀年増刊』（第12期）掲載。のち一部修正したものが「彼脱拉克与文芸復興」（ペトラルカと文芸復興）と改題され『衡哲散文集』に収録。

「近作西洋史序言」

1923年『努力週報』第73期（1923年10月7日）掲載。

『西洋史』（上巻）

1924年1月、商務院書館より刊行。

「鷄鳴寺看月出」白話詩。

1924年4月20日作。『文学旬刊』第39期（1924年6月21日）掲載。

「運河與揚子江（小説）」

1924年『東方雑誌』第21巻第13号（1924年7月10日）掲載。のち、これを英訳したものを英文の自伝の冒頭に収録している。

「國家教育與國際教育」

1924年8月執筆。『教育与人生』（第42期）掲載。『衡哲散文集』収録。

「雨中的草木」白話詩。

1924年『文学旬刊』第46期（1924年9月1日）掲載。

「西風（小説）」小説

1924年『東方雑誌』第21巻第17号（1924年9月10日）掲載。短編小説。のち茅盾著「創造」と巴金著「白鳥之歌」とともに『西風』（商務院書館、1934年）収録。

「洛綺思的問題」。

1924年『小説月報』第15巻第10号（1924年10月10日）掲載。小説。

『小雨点』（新月書店、1928年）収録。

「秋虫與胡蝶」 寓話／小説

1924年『文学旬刊』第52期（1924年11月5日）掲載。

「一個改良大學教育的提議」 任鴻雋・陳衡哲の連名

1925年『現代評論』第2巻第39期（1925年9月4日）掲載。

「南京與北京」

1926年『現代評論』（第一年週紀念増刊号）掲載。

「歴史教學與人類前途」

1925年『晨報七週紀念増刊』（1925年12月1日）掲載。

『文藝復興小史』

1926年1月1日、岫廬（王雲五）主編の百科小叢書の一冊として
商務院書館より刊行。

『西洋史』（下巻）

1926年2月商務院書館より刊行。

「衛生歌」 白話詩

1926年3月25日作。1926年3月『医薬学』（第3巻第5期）掲載。
一部を「睡得早」（陳衡哲作詞、胡周淑安作曲）として1930年『兒童教育』（第2巻第4期）に発表。

「亜波拉與愛洛綺絲」

1926年6月執筆。『衡哲散文集』収録。

「北戴河一周游記」 署名 沙菲

1926年8月執筆。『晨報副鐫』（第60期）掲載。『衡哲散文集』収録。

「我為什麼贊成愛國中学？」

1926年9月3日執筆。『晨報副鐫』第46号（1926年9月7日）掲載。

「一支扣針的古事」 署名 沙菲 小説

1926年『現代評論』第106期（1926年12月18日）掲載。「一支扣針
的故事」として『小雨点』収録。

「婦女與職業 婦女問題 一」

1927年1月『現代評論』（第二週年紀念増刊号）掲載。『衡哲散文
集』収録。

「一個戰時的和平家」

1927年2月24日執筆。Addams, Jane. *Peace and Bread in Time of War* を読んでの感想。『現代評論』第5巻第117期（1927年3月5日）掲載。

『西洋史』六版序

1927年6月記す。

“Outstanding Cultural Assets of the Chinese People.”

1927年7月執筆、のち *The Chinese Woman and four other essays*, 2d ed. Peiping: January 1934収録。

「太平洋國交會議記略」

1927年8月 上海に帰国途上で加筆。1928年『現代評論』第6巻第142期（1928年8月27日）執筆。

「愛」歌詞

1928年『音楽雑誌』（第1巻第1期）掲載。陳衡哲作詞、蕭友梅作曲（1927.8.17と書きこみあり）。

『小雨天』

1928年4月、新月書店より刊行。1933年に同じく新月書店より再版。1939年商務院書館より再版されるまでに数回刊行されたようである。

“The Chinese Woman in a Modern World” 署名 Sophia Chen Zen

Pacific Affairs, Vol. 2 no. 1 (January, 1929): 8-15. 掲載。

のち *The Chinese Woman and four other essays*, 2d ed. Peiping: January 1934. 収録。

『西洋史』（第7刷）

1929年11月、新學制高級中學教科書の一冊として商務印書館より刊行。陳の『西洋史』としては第7刷。

「對太平洋國交討論會の感想」

1929年『新紀元週報』第1巻第39号（1929年12月20日）掲載。

「一封公開的信 太平洋國交討論會中國支部諸君公鑒」

1929年12月27日執筆。耿雲志主編『胡適遺稿及秘藏書』影印本、第36冊、黄山書社、1994年、206頁。

『歐州文藝復興小史』

1930年4月、王雲五編集の萬有文庫第一集の一冊として商務院書館より刊行。1926年刊行の『文藝復興小史』と内容はほぼ重なるが、一部語句の異動と挿絵の差し替えがある。

「睡得早」歌詞

1930年『兒童教育』（第2巻第4期）掲載。陳衡哲作詞、胡周淑安作曲。1926年創作の白話詩「衛生歌」の一部を歌詞としたもの。

「說過渡時代一為「大公報」三十周年紀念專刊作」

1931年3月執筆。『衡哲散文集』収録。

Symposium on Chinese Culture. 陳衡哲編集担当の論文集、署名 Sophia H. Chen Zen。

上海にて1931年、China Institute of Pacific Relations より刊行。1931年10月21日～11月4日まで杭州で開催された Institute of Pacific Relations（太平洋問題調査会）第4回会議用に準備した論文集。陳衡哲編集。1935年に『支那文化論叢』（石田幹之助監訳、東京、生活出版社）として邦訳刊行。

“Summary of China’s Cultural Problems Being the Concluding Chapter in the Symposium on Chinese Culture”

1931年5月執筆。*Symposium on Chinese Culture* 収録。

「人生道上」

1931年5月15日北平にて執筆。『生活』第6巻第24期（1931年6月6日）掲載。

「人生道上 人格與婦女」

1931年6月16日北平にて執筆。『生活』第6巻第29期（1931年7月11日）掲載。

「適應環境與改造環境」

1931年7月18日北平にて執筆。『生活』第6巻第32期（1931年8

月1日)掲載。『衡哲散文集』収録。

「老柏與野薔薇」小説

1931年7月12日北平にて執筆。1931年『北斗』創刊号(1931年9月20日)掲載。土井彦一郎による陳衡哲小説の初の邦訳「老いたる柏と野薔薇の對話」が『西湖の夜 白話文學二十篇』(東京白水社、1939年)に収録。

“The Good Earth by Pearl Buck.” 署名 Sophia Chen Zen 書評

Pacific Affairs, vol. 4 .no.10 (October, 1931): 914-915掲載。『大地』の書評。

“China’s Changing Culture.”

1931年 *Pacific Affairs*, vol. 4 .no.12 (December, 1931): 1070-1081掲載。

「掀天動地的蘇俄革命」署名 哲

1932年『独立評論』第2号(1932年5月29日)掲載。Maurice Hindus 著 *Humanity Uprooted*. New York: Cope and Smith, 1929の書評。

「赤色麵包」(新書紹介)書評

1932年『独立評論』第5号(1932年6月19日)掲載。Maurice Hindus 著 *The Red Bread*. New York: Cope and Smith, 1931の書評。

「論鴉片與公賣」

1932年7月4日執筆。『独立評論』第8号(1932年7月10日)掲載。

「中國文化的崩潰(新書紹介)」書評

1932年『独立評論』第10号(1932年7月24日)掲載。Nathaniel Peffer (裴斐) 著 *China: The Collapse of a Civilization*. New York: John Day Co, 1930の書評。

“Review of Nathaniel Peffer’s *China: The Collapse of a Civilization*.”

Vassar Quarterly (November 1932): 338-39. Alumni, Zen, 1919. Special Collections, Vassar College Libraries. 上記の英語版。注

に、原稿は Mrs. Chen Zen. から送られたとある。

「答一位少年女朋友」（通信）

1932年『独立評論』第13号（1932年8月14日）掲載。投稿への返答。

「關於暴風雨中的七個女性—陳衡哲先生致丁玲的信」

1932年8月31日執筆。田漢の戯曲「關於暴風雨中的七個女性」への苦情を述べた丁玲宛の手紙。『文学月刊』掲載を希望し、丁玲が編集部へ掲載を頼んだことにより『文学月報』（第1巻第4期）に掲載される。

「再遊北戴河」

1932年9月執筆。『衡哲散文集』収録。

「皮爾德的美國文化史」書評

1932年『独立評論』第20号（1932年10月2日）掲載。Charles A. and Mary R. Beard 著 *The Rise of American Civilization*. New York: Macmillan Co, 1927の書評。

「中年」署名 蘇生

1932年『独立評論』第27号（1932年11月20日）掲載。のち「說中年」と改題し『衡哲散文集』収録。

「人才與政治」

1932年『独立評論』第29号（1932年12月4日）掲載。
『衡哲散文集』収録。

「小婦人」（新書評論）書評

1932年『独立評論』第30号（1932年12月11日）掲載。Alcott, Louisa M. *Little Women*, 鄭曉滄訳（杭州浙江印刷公司、1932年）の書評。

「女子教育的根本問題」

1932年12月執筆、『独立評論』第32期（1932年12月25日）掲載。
『衡哲散文集』収録。

“Influences of Foreign Cultures on the Chinese Woman.”

1932年執筆。*The Chinese Woman and Four Other Essays*, 2d ed. 収録。

「民族國家主義與中國的教育」書評

1933年『独立評論』第35号（1933年1月15日）掲載。Crus H. Peake 著 *Nationalism and Education in Modern China*. New York: Columbia University Press, 1932の書評。

「岐路」（書評）

1933年『独立評論』第39号（1933年2月26日）掲載。曹寶蓀著（女青年會全國協會、1933年刊行）の小説の書評。

「國難與知識界的婦女」

1933年『独立評論』第41号（1933年3月12日）掲載。

『衡哲散文集』収録。

「居里夫人（Madame Curie）」

1933年『独立評論』（第44号（1933年4月2日））掲載。

『衡哲散文集』収録。

「亜丹女史（Miss Jane Addams）」

1933年『独立評論』第47号（1933年4月23日）掲載。のち加筆修正したものを「亜丹女士小伝（1860-1935）——一位救世主的人格」と改題して『衡哲散文集』に収録。

「清華大学與國恥」

1933年5月『独立評論』第50号（1933年5月14日）掲載。

『衡哲散文集』収録。

「定縣農村中見到的平教會事業」

1933年『独立評論』第51号（1933年5月21日）掲載。

『衡哲散文集』収録。

「好爾廳的基本工作」

1933年『独立評論』第55号（1933年6月18日）掲載。Jane Addams が関わった「ハルハウス」の紹介。『衡哲散文集』収録。

「太平洋國際學會」

1933年『独立評論』第60期（1933年7月23日）掲載。

「有幸有不幸」署名 哲（＊陳衡哲かどうか不確定）

1933年『社会新聞』第4巻第14期（1933年8月12日）掲載。

“What I Owe Vassar College.”

New Deal (September 13, 1933)

「回到母校去」

1933年11月13日執筆。『独立評論』第77期（1933年11月19日）掲載。『衡哲散文集』収録。

「重游北美的幾点感想—在燕京大学演講」

1933年12月執筆。『独立評論』第80期（1933年12月10日）掲載。

『衡哲散文集』収録。

『西風』短編小説集

1933年12月、王雲五、李聖五の編集により商務院書館より刊行。

収録作品は陳衡哲「西風」、茅盾「創造」、巴金「白鳥之歌」の三篇。

“A Non-Christian Estimation of the Missionary Activities”

1933年12月執筆。*The Chinese Woman and Four Other Essays*.
2ed edition. 収録。

The Chinese Woman and Four Other Essays. 2ed ed. Peiping: 1934

1934年1月にPeiping（北平）で刊行。以下の5編を収録。

The Chinese Women in a Modern World

Influences of Foreign Cultures on the Chinese Woman.

A Non-Christian Estimation of the Missionary Activities.

Outstanding Cultural Assets of the Chinese People

Summary of China's Cultural Problems.

“LOUISE'S PROBLEM” By Sophia.H.Chen（陳衡哲）Translated By
Dju Mei-sien

1934年『金陵女子文理学院校刊』。『洛綺思的問題』の英訳。英訳は本人ではない。「洛綺思」はLouise（ルイス）と読ませている。

「對於兒童教育的一個意見」

1934年『獨立評論』第91号（1934年3月11日）掲載、『衡哲散文集』収録。

「好妻子」（新書紹介）

1934年『獨立評論』第94号（1934年4月1日）掲載。Louisa May Alcott の *Good Wives*（続・若草物語）、鄭曉滄訳（開明書店）の書評。

「關與現代婚姻問題的又一解」

1934年『國聞周報』第11卷第15期（1934年4月16日）掲載。

「婦女問題的根本談」

1934年『獨立評論』第97号（1934年4月22日）掲載、『衡哲散文集』収録。

「對於秦氏全家自殺的意見」

1934年『獨立評論』第101号（1934年5月20日）掲載、『衡哲散文集』収録。

「『日本和平』の又一個看法」

1934年『獨立評論』第102号（1934年5月27日）掲載、『衡哲散文集』に「所謂『日本和平』」として収録。

「哀悼居里夫人」

1934年『獨立評論』第109号（1934年7月15日）掲載、『衡哲散文集』収録。

「從北平飛到太原」

1934年7月執筆、『獨立評論』第110号（1934年7月22日）、『東方雜誌』第21卷第13号（1924年7月10日）掲載、『衡哲散文集』収録。

「教育與智識」

1934年『獨立評論』第117号（1934年9月9日）掲載、『衡哲散文集』収録。

「小伙計、現在怎樣呢」（書評）

1934年10月『独立評論』第123期（1934年10月21日）掲載。Hans Fallada 著 *Little Man, What now ?* Eric Sutton による英訳、（New York: Simon and Schuster, 1933）の書評。

「法律能維持情感嗎？」

1934年11月11日執筆。1934年『独立評論』第127号（1934年11月18日）掲載。『文化月刊』第1巻第11期（1934年12月15日）に転載。『衡哲散文集』収録。

「両性問題與社會意識」

1934年『独立評論』第128期（1934年11月25日）掲載。『衡哲散文集』収録。

「論華北外交」署名 哲衡 *（陳衡哲かどうか不確定）

1934年『華年』第3巻第16期

『新生活與婦女解放』

1934年、葉楚傖総主編『新生活叢書』の一冊として正中書局より刊行。

「新中國女子の五年計画」

1935年『独立評論』第137号（1935年1月27日）掲載。

「海波的歌」詩

1935年『新文学』第1巻第1期（1935年4月10日）掲載。詩。未見。目次で題名のみ確認。

「紀念一位老姑母」

1935年『東方雜誌』第32巻第1号（1935年1月1日）掲載。『衡哲散文集』収録。

「青年的康健問題」

1935年1月『骨鯁』（第53-54期）掲載。1935年1月27日『大公報』より転載。

「居里夫婦合傳訳本紹介語」

1935年『独立評論』第139号（1935年2月24日）掲載。*Pierre Curie*. translated by Vernon and Charlotte Kellogg, New York:

Macmillan, 1932の紹介。

「一個理想的生活」

1935年2月『長城』（第2巻第2期）掲載。

「『父母之命』與自由結婚」

1935年『獨立評論』第142号（1935年3月17日）掲載。『衡哲散文集』収録。

「一個小小調查表的緣起」

1935年『獨立評論』第145号（1935年4月7日）掲載。

「關於『父母之命』的一段談話」

1935年『獨立評論』第148号（1935年4月28日）掲載。『衡哲散文集』収録。

「調查小學路兒童健康的結果」

1935年『獨立評論』第151号（1935年5月19日）及び『中華教育界』（第23巻第2期）に掲載。

「心理康健與民族的活力」

1935年『獨立評論』第154号（1935年6月9日）、『健康生活』（第4巻第2期）に転載。『衡哲散文集』収録。

「我們走的是那一條路？」

1935年『獨立評論』第157号（1935年6月30日）掲載。『華年』（第4巻第28期）に転載。「兩種活——對北平藝文中学畢業生的演說」

1935年『浙江青年』第1巻第9期（1935年7月）掲載。注に『漢口學生』にも同時掲載とある。

「介紹一種青年的讀品」

1935年『浙江青年』第1巻第9期（1935年7月）掲載。『獨立評論』第158号（7月7日）掲載の「介紹兩種青年的讀品」で再度取り上げる。

「介紹兩種青年的讀品」

1935年『獨立評論』第158号（1935年7月7日）掲載。

『浙江青年月刊』（浙江教育廳編集）及び蔣秀峯編訳 *Popular*

Chinese Tales（中國著名故事）の紹介。

「復古與独裁勢力下婦女的立場」

1935年『独立評論』第159号（1935年7月14日）掲載。

「兒童年的感想：（十一）對於兒童年的三種希望」

1935年6月『現代父母』第3卷第6期）掲載。

「関与女子教育的幾句話」

1935年『独立評論』第161号（1935年7月28日）掲載。

「救救中学生」

1935年9月22日『大公報』『日曜論文』として掲載のち、『中華教育界』（第23卷6期）、『独立評論』第170号（9月29日）、『國聞周報』（第12卷第38期）、『青年月刊』第1卷第1期（10月15日）に転載。

「中学生康健問題」

1935年『健康生活』第5卷第4期（1935年10月5日）掲載。9月22日付け『天津大公報』掲載の「救救中学生」を改題して転載したもの。

Autobiography of A Chinese Young Girl. 署名 Chen Nan-Hua（陳南華）

1935年9月に北平で刊行。英文で書かれた自伝。

『小雨点』

1936年1月商務印書館より再版。

「川行瑣記」

1936年『独立評論』第190号（1936年3月1日）掲載。

「川行瑣記（二）四川的『二雲』」

1936年『独立評論』第195号（1936年4月5日）掲載。

「川行瑣記（三）成都の春」

1936年6月『独立評論』第207号（1936年6月28日）掲載。

「成都の春：一封給朋友的公信」

1936年『西北風』第5期（1936年7月1日）掲載。

「川行瑣記（四）歸途」

1936年『獨立評論』第216号（1936年8月30日）掲載。

「新生活與婦女解放」

1936年『婦女新生活月刊』（第5、6、7、8期）、1937年『婦女新生活月刊』（第5、6、7期）に連載。

「環境與天才的關係——一個寓言」

1936年9月發表。＊⑨より。『衡哲散文集』収録。

「南猿與北猿：證明環境與天才的關係」

1936年9月『瀟湘漣漪』（第2卷第7期）掲載。

「婦女參政問題的實際方面」

1936年『獨立評論』第225号（1936年11月1日）掲載。

「三個朋友」

1936年12月に完成し胡適の意見を求める。＊⑨より。小説。未刊行。未見。

「做官與做事」

1937年『海王』第9卷第23期（1937年4月30日）掲載。

「青年的修養問題——天津『青年生活指導周』講演原稿」

1937年5月『獨立評論』第235号（1937年5月23日）掲載。

「談青年戀愛修養」

1937年『學校新聞』（第64期）掲載。

「贈某女士」白話詩

1936年2月2日北平にて作。1937年『奔濤』（創刊号）掲載。

「一百五十年来欧州的國際戦争」

1937年『浙江青年』第3卷第7期（1937年5月15日）に連載。

「婦女在戰時的責任」

1937年8月執筆、『抗戰半月刊』第1卷第2期（1937年10月16日）掲載。

「我幼時求學的經過——紀念我的舅父庄思緘先生」

1938年『宇宙風』第56期に掲載。

「婦女問題隨筆」

1938年『宇宙風』第67期に掲載。未見

「婦女問題隨筆」

「一位『一言興邦』的女子」「女子の雙重人格與女子教育」の二編
1938年『宇宙風』第68期（1938年5月16日）掲載。

「婦女在大火場中：婦女問題隨筆（續）」

1938年『宇宙風』第69期に掲載。

「婦女問題隨筆」

1938年『宇宙風』第71期に連載。未見

「國難所奠定的復興基石」

1937年12月執筆。1938年『戰時童子軍』第9期（1938年2月12日）掲載。『半月文摘』（1938年第2巻第3期）掲載。

『衡哲散文集』（上下）

1938年12月、上海開明書店より刊行。

「中華全国文芸界抗敵協會香港分会成立宣言」

1939年4月5日香港『大風』掲載。未見。*⑱より。

『小雨点』

1939年6月、第4回目の再版。商務印書館より刊行。

「談教育問題」

1943年9月『天下文章』（第1巻第5期）掲載。

「特輯：蔡子民先生的逸事二則」

1943年『時代生活』（第1巻第2期）掲載。

“I saw War in Hongkong”

1944年 *Vassar Alumni Magazine*, (April 15, 1944): 4-8掲載。

「談乱世文人」

1944年9月『文芸周刊』（第9期）掲載。

「現代女作家書簡」

1944年9月『風雨談』（第11期）掲載の女性作家のうち陳衡哲の書信三通が掲載。

「社会公道の意義與使命」

1944年『雍言』（第4巻第10期）掲載。『大公報』より転載。

「我對於從軍青年的致敬與期望」

1944年『中外春秋』（第3巻第1期）掲載。

「創造慾與占有慾」

1945年『女青年』第1巻9期（1945年5月15日）掲載、のち『書報精華』第12期（1945年12月20日）に転載。

「寄自重慶」重慶より「詠李易安三章」の旧体詩とともに寄せた書信

1945年『平論』（第4期）掲載。

「健康第一」

1945年9月『時兆月報』（第4巻第9期）掲載。

「論死的積極意義」

1945年『平論』（第6期）掲載。

「自伝」

1945年『出版界』（第2巻第1期）掲載。のち1945年11月『婦女新運』（第7巻第9期）転載。

「從軍特輯：青年從軍運動的副作用」

1945年『西北公路』（第6巻第4-6期）掲載。

「関與婦女的希望與憂慮」

1945年『平論』（第9期）、『書報精華』（第3期）掲載。

「是我們自省的時候了：勝利感言之二」

1945年『客觀』（第5期）掲載。『大公報』より転載。

「說好名」

1946年1月『婦女文化』（創刊号）掲載。

「美国文化在中國」

1946年7月9日『湖南国民日報』掲載、1946年『粵秀文藝』（第1巻第4期）に転載。

「客座記言一 你是不是基督教徒？」

1946年10月15日米国ケンブリッジにて執筆。『觀察』第1巻第11

期（1946年11月9日）掲載。

「客座記言二 西方人『回到宗教去』の意義」

1946年『觀察』第1巻第13期（1946年11月23日）掲載。

「美國家庭素描（通訊）」

1947年『世界月刊』（1947年第1巻第6期）掲載。アメリカ訪問中の陳衡哲が編集部に寄せたエッセイの抜粋。

「客座記言三 「主敬」是迂拙嗎？」

1947年3月『觀察』第2巻第3期（1947年3月15日）掲載。

「客座記言四 民主園中の嘉木與惡草」

1947年3月『觀察』第2巻第5期（1947年3月29日）掲載。

「採桑子」旧体詩

1947年4月『書報精華副刊』（第9期）掲載。

「客座記言五 平衡生活的一個方案」

1947年『觀察』（第2巻第10期（1947年5月3日））掲載。

「乘風好」旧体詩

1947年『觀察』第2巻第11期（1947年5月10日））掲載。

「関于自由思想分子（通信）」

1947年5月『觀察』第2巻第12期（1947年5月17日）掲載。

儲安平への手紙。

「我們要的是和平」

1947年？『觀察』（第2巻第24期）掲載。未見。

「写在『為中國的農業試探一条出路』的前面」

1947年『觀察』第3巻第3期（1947年9月13日）掲載。

「中國學生在美國」

1948年『浙贛路訊』第241期（1948年4月14日）掲載。

「創造自己的生命：運河與揚子江」

1949年『新兒童世界』（第27期）掲載。

哀詞4首 旧体詩

1961年11月作。＊⑨より。

「任叔永不朽」

1962年 7 月執筆。＊⑨より

以上

解題

一、陳衡哲は、日本では、戦前、彼女が「太平洋国際学会」⁽⁵⁾の中国側代表の一人として論文集編集にあたったことから一部の中国研究者の間では知られていたが、戦後は紹介も研究も少なく今日ごく一部で取り上げられるに留まっている。中国においては、1980年代以降胡適に関する研究が復活するにともない、白話運動の担い手の一人として陳衡哲にも再び関心が集まり、特にフェミニズムの視点から彼女の女性問題関連の論評、創作が注目されるようになった。さらに英文による前半生の自伝 *Autobiography of A Chinese Young Girl* の中国語訳が刊行された⁽⁶⁾2010年あたりから一気に研究が活発になり、学術データベース CNKI によると現時点（2015年）で2000を超える研究論文が書かれている。

筆者は2008年、「女師大事件」当事者である楊蔭榆の米国での状況を追跡調査している時、中国人米国留学生たちの活動を記した *Chinese Student monthly*⁽⁷⁾に行きあたり、そこで陳衡哲の活躍を知り、また上述、陳衡哲の英文自伝及び彼女の編集した歴史教科書『西洋史』を読んでそれらの魅力に惹かれ、現代中国文学におけるこの作家の重要性を知るようになったものである。

大変残念なことに、日中戦争及び文化大革命に到る混乱の中で彼女自筆のノートや書信等はかなりの部分が失われている。陳衡哲は夫任鴻雋（1886-1961）と共に、教育、文芸界及び政界に幅広い人脈を持ち、アメリカとのパイプもあり、1910年代半ばから中華人民共和国成立まで活発に活動していた。失われたメモや他の人々との往復書簡は、現代中国の一つの側面を提示する貴重な歴史の証言であったわけだが、今後どこかでまた発掘されうる可能性がないわけではない。

今回の目録は、もともと陳衡哲に関する拙論の付録として『慶應義塾日吉紀要』に分割して掲載していたもの⁽⁸⁾だが、今回全面的に補足修正を行ったうえで一括し、閲覧の便を図った。陳衡哲に関しては、

今後文学という分野を超えて歴史、教育分野における日本・中国・その他の国内外からの論考が為されると予想される。今回作成した目録も暫定的なものであり、誤記、遺漏があると思われる。今後新たな資料が出てきた際に追って補遺を作成するつもりである。読者、利用者のご指教をお願いしたい。

二、陳衡哲について

陳衡哲の経歴について日本語で読むことのできる資料はまだごくわずかである⁽⁹⁾。主に陳衡哲自身による短い「自伝」⁽¹⁰⁾と、彼女の実妹の補足修正を経た「陳衡哲略伝」⁽¹¹⁾をもとに今一度略歴を紹介しておく。

陳衡哲（1897年7月12日-1976年1月7日）、江蘇省常州武進の人。筆名は莎菲、Sophia H. Z. Chen、哲等。父、陳当韜は四川の官僚、四川県知事を勤める。母は莊曜孚、書家、画家。号「六梅室主人」。この両親と母方の叔父、莊蘊寛のもとで古典を学び、のち上海女子中西医学堂⁽¹²⁾で3年ほど学ぶ。1914年、第一回義和団事変賠償金女子奨学生として渡米、ヴァッサー女子大で学士号を、シカゴ大学で修士号を取得。専攻は西洋史、副専攻として欧米文学を学ぶ。1920年9月、北京大学学長の蔡元培の要請に応え、北京大学初の女性教授として西洋史の教授に就任。同年、先にアメリカより帰国していた任鴻雋と結婚。子供は、長女、任以都（1921- ）次女、任以書（1925-?）長男、任以安（1928- ）の三人。1921年に北京大学の職を辞し、子育てをしながら『西洋史』他歴史の教科書を執筆。その後南京の東南大学で半年ほど教え、1930年に再び北大に戻り、1年ほど教える。この間、『西洋史』上下、『文芸復興小史』等の教科書、短編小説集『小雨点』、『衡哲散文集』、英文著作3、4冊等を刊行。また1927年から1933年にかけて計4回太平洋学会に中国代表として出席し、また任鴻雋、胡適

等と『努力週刊』、『独立評論』を創刊し、時事関係のエッセイを多数執筆。日中戦争勃発以降は、香港、四川、雲南等各地を転々としながら、中国語、英語の二カ国語でエッセイを執筆、発表。1949年以降、任鴻雋とともに上海にとどまり、上海市政治協商委員会委員に任命されるが、体調不良を理由に社会活動から距離を置く。1961年、夫任鴻雋が亡くなる。晩年は視力をほぼ失い、1976年に死去した。享年86歳。

三、史料補遺について

陳衡哲の著訳目録では、1938年8月発表の「婦女問題」から1943年9月発表の「談教育問題」まで約5年の空白がある。それは、1937年日中戦争の勃発以降、日本軍の侵攻に伴い北京（当時は北平）を離れ南方各地を転々とする避難生活を余儀なくされていた期間である。

当時陳衡哲一家がどのような状況にあったかは、上述の「陳衡哲略伝」及び、2010年に刊行された『陳衡哲伝“造命”人生的歌者』⁽¹³⁾、当時学生として陳衡哲一家と親交のあった程靖宇の回想録「敬懷莎菲女士陳衡哲教授」⁽¹⁴⁾に記載がある。

それらをもとに状況を簡単にまとめてみると以下ようになる。まず1937年7月7日に盧溝橋事件が勃発すると、北京（当時は北平）で夫、任鴻雋の留守を預かっていた陳衡哲は南下を決め、上海で夫と合流したあと、8月13日の上海事変直前に江西省廬山へと移るが、日本軍の進行に伴い、一家で1938年に廬山を離れ、漢口、広州を経由して香港に移動する。しかし、陳、任夫婦は子供たちの教育環境を考えてさらに昆明に移り、長女を北京、清華、南開大学が合流した西南連合大学に入学させる。ところが昆明でも空襲が激しくなり勉強どころではなくなったため、長女を陳衡哲の母校である Vassar に留学させることにし、1941年7月、彼女を香港、上海を経て太平洋航路でアメリカへ旅立たせる。そして、昆明では中等教育の条件がないことを心配し次女と長男を香港の学校に入れるべく、任鴻雋を昆明に残して、陳

衡哲は子供たちと11月27日に香港へわたる。ところがその11日後、12月8日に日本軍が香港に侵攻し、12月25日には香港陥落、陳衡哲は子供二人と香港に閉じ込められてしまう。陳衡哲母子は約6か月後の1942年6月に香港脱出を敢行し、当時フランス租借地であった広州湾（現在の広東省陣湛江市）から雷州半島に入り、半島を徒歩で縦断、陸路を江西、貴州と進み最後によりやう四川の重慶で任鴻雋と合流する。そして陳衡哲の執筆活動が再開されるわけである。一家は1946年に上海に移るまで重慶で過ごすことになる。

ところで、上述の「陳衡哲略伝」にも『陳衡哲伝』にも具体的な記述はないが、陳衡哲は重慶にいったん落ち着いて後の1944年、母校 Vassar college の紀要に、太平洋戦争勃発前後から香港を脱出するまでの体験談を送っている。これが今回訳出した“I saw War in Hong kong”⁽¹⁵⁾である。1941年当時に彼女がノートにメモしたものをのちに整理してまとめたもので、表題から知れるように英語で書かれている。「全てを語ることはまだとても危険であるが」と彼女自身がそこで述べているように、中国の要人としてマークされていた当時の状況を反映して、脱出ルート of 具体的な地点、関与した人々等は明記されていない。それでも感情を排し細部の描写に意を注いで事実を提示する冷静な記録は、現場の生々しさを伝えており、戦火の体験を語り継ぐことの意義と重要性を意識した歴史家の言として、私たちが今読むべき価値を十分に備えた歴史の証言となっている。これはまた、陳衡哲著目録の空白を一部補う史料になるとも考えられるため、Vassar College Library Special collections より特別に許可を得て補遺として今回訳出したものである。

なお、太平洋戦争勃発後の香港の状況についてはすでに多数の著作があり⁽¹⁶⁾、文学の分野で言えば、香港島側から描いた茅盾と張愛玲のルポ／散文が有名である。それぞれ個性ある作家の描写を併せ読むことで、“I Saw War in Hongkong”の提示する真実への理解が深まることと思う。

史料補遺

「私は香港で戦争を目撃した」

〔香港の地図。30頁の写真参照〕

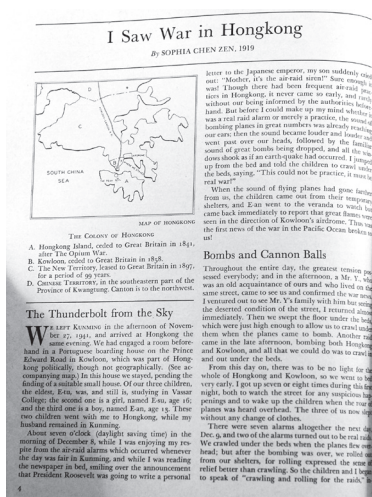
香港の植民地

- A. 香港島、1841年、アヘン戦争後に英国に接収される。
- B. 九龍、1858年に英国に接収される。
- C. 新界、1897年、99年の期限で英国に租借される。
- D. 中国の領土、広東省の南東部。広東はその北西。

空からの威嚇

私たちは1941年11月27日午後昆明を出発し、その晩香港に到着した。地理的ではないが政治的には香港の一部である九龍（Kowloon）のプリンス・エドワード・ロードにあるポルトガル人経営の賄い付き宿（boarding house）には前もってひと部屋予約を取っていた（添付の地図参照）。適当な小さな家が見つかるまでの間私たちはこの宿に滞在した。三人の子供のうち、長女の以都（E-tu）はバツサーカレッジで学んでおり今も学んでいる。二人目の子供は女の子で以書（E-su）といい十六歳である。三人目は息子で以安（E-an）といい十三歳である。この二人の子供は、私と一緒に香港に行き、夫は昆明に残った。

12月8日の朝7時（サマータイムで）ごろ、空襲警報—昆明では晴れた日にはいつも発令された—から解放された一時を楽しみ、ベッドで新聞を読みながら、ルーズベルト大統領が書簡を日本の天皇宛にしたためるところだという発表に笑みを浮かべた時、息子が突然「母さん、空襲警報のサイレンだ」と叫んだ。確かにその通りだった。香港ではしばしば空襲警報訓練が行われたが、こんな朝早くから行われたことはなかったし、普通は前もって当局からの通知があった。しかし、



出典：“I Saw War in Hongkong” by SOPHIA CHEN ZEN, 1919.
Vassar Alumni Magazine, (April 15, 1944): 4-8. Special Collection, Vassar Collection.

が上がっているのが見えたと言った。こうして太平洋戦争の最初のニュースが私たちにもたらされたのである。

爆弾と砲弾

その日一日中、私たちは緊迫感に包まれていた。午後になって古くからの友人で同じ通りに住んでいるY氏が様子を見にやってくると、戦争のニュースが本当であると告げた。私は思い切ってY氏と一緒に彼の家族に会いに出かけたが、人っ子ひとりいない通りの状況を見て即座に戻った。そしてベッドの下をきれいに掃いた。そこには爆撃機が来たとき這って入るだけのすき間が辛うじてあった。午後遅くにもう一度爆撃があり香港と九龍の双方が爆撃されたが、私たちにできることはベッドの下に這って入りまた出てくることだけだった。

この日を境に香港と九龍全体から明かりが消えた。それで私たちは

これが本当の空襲警報かそれとの単なる訓練かを決めかねている間に大量の爆撃機の音が聞こえてきた。音はますます大きくなりとうとう頭上まで来た、と耳慣れた爆弾の大規模な投下音、そして地震が起きたように窓という窓が震えた。私はベッドから飛び起き、「訓練じゃない、本物よ！」と叫びながら子供たちをベッドの下に潜らせた。爆撃機の音が遠ざかると、子供たちは臨時のシェルターから出てきた。そして以安が様子を見にベランダに出たがすぐに戻り、九龍空港の方角に大きな火の手

とても早く床についた。この最初の晩、私は夜中に七、八回起きたが、それは通りに不穏な動きがないかを見るためと飛行機の轟音が頭上に響いた時に子供たちを起こすためであった。私たち三人はもはや服を着替えずに寝た。

翌日の12月9日には全部で七回の警報が鳴り、そのうちの二回が本当の爆撃に変わった。爆撃機が頭上を通り過ぎる時、私たちはベットの下に腹ばいになって入り込んだが、爆撃が済むとそこから転がりながら出てきた。というのは転がることは這いつくばることより安堵の感を表現できるからである。というわけで子供たちと私は、昆明で使った「爆撃用ダッシュ」という表現のかわりに「爆撃用匍匐と回転」と表現するようになった。

郵便ルートがまだ閉鎖されていないことを願いながら、私は昆明にいる夫に電報と航空便で手紙を、それからアメリカにいる娘にも航空便で手紙を送り、二人に今のところ私たちは無事であることを知らせようとした。半年後にわかったのだが、きちんと届いたのは電報だけだった。

戦争開始から三日目の12月10日に、戦闘はますます激しくなり、空からの攻撃だけでなく、砲弾とマシンガンを浴びる大いなる危機が迫っていた。午後、私は危険を冒して古くからの友人を見舞いにいったが、強い絶望感とともに戻った。というのは、通りは完全に打ち捨てられ、あらゆる人々、兵士、警官、バス、車の何もかもがそっくり姿を消していたからである。後からわかったのだが、香港当局は、秩序維持の多大なる必要性のためという理由で全ての警察権力を九龍から引き上げており、したがってこの植民地はうち捨てられ、ここの住民は無政府状態のままに放っておかれたのである。同じフラットの何人かの欧州人はとりわけ憤り、そのうちの一人が私に言った。

「案の定、当局は私たちを邪魔者扱いにするわけだ！」

「私もそう思うけれど」私は言った。「でもどうしてあなた方、ヨーロッパ人に対して何もしてくれないの？」

そのヨーロッパ人の宿泊人は笑って言った。「英国人全員と米国人の一部がとくに香港のヴィクトリア・ピークに避難しているのを知らないのかい？まだ避難がなっていなかったらここを無政府状態にしておくはずがないだろ。われわれ欧州人一般は彼らと同等じゃない。君たちと同じ運命を分け合うことになるかもしれないわけさ！」

けれども、ヴィクトリア・ピークに避難した人々は安全でも無傷でもなく、無政府状態に放置された者たちよりもさらにひどい運命をたどることになった。だが、これは別の話になるので、最後に述べることにしよう。

12月11日は九龍で経験した最悪の日だった。通りが完全に放棄されただけでなく、強盗らしき集団が建物の片隅や街角に現れ始めたのである。九龍の運命は最早これまでと見て取った借家人たちは皆、他の場所へと去った。私たちの家主も家を離れ、カトリックが経営する施設に移っていった。こうして、子供たちと私は、半ダースの使用人つきでこの家の三つの階を占有することになった。ただしほとんどの使用人は信用できないため、家の外より中にいるほうがより危険に感じた。

午後いっぱい、それとわかる悲鳴や叫び声が近くから聞こえてきた。略奪が始まったのである。たそがれ時分には私の不安はさらに強くなった。はたして今夜安全にやり過ごすことができるのだろうか。突然、押し殺した啜り泣きが様々なささやき声に混ざって家の中から聞こえてきた。私たちは盗賊たちか日本人（Japs）が来たのだと思い、部屋の扉を閉めた。けれどもささやき声ははっきりしてくるにつれて、すすり泣きが女性のものであることがあきらかになり、暴力の兆候がないことがわかった。私はドアをかすかに開け耳をそばだてた。それから、声をする部屋にいくと、通りの角で強盗にあい、ネックレスから時計、指輪、スカーフ等、着ている服以外すべて剥ぎ取られた女性が一人いた。この女性、ミセス・Sは若い米国人で、結婚相手のポルトガル人がまだ香港にいた。彼女が私たちのいる家に來たの

は、ここが近隣で唯一扉を開けてくれたからである。私はたちまち彼女と仲良くなった。同じ家の中で困難を分かち合えるよき心の持ち主と一緒にいられるのはとても幸運だと感じたが、彼女も同じように感じたのだ。

翌日、朝の略奪が終わった後、再び静寂が訪れた。そして突然、昼時だったが、誰かが通りを走りぬけながら中国語で「ジャップのやつらがくるぞ！ジャップのやつらがくるぞ！」と叫んだ。これは、略奪集団が居住民を混乱に陥れようとする目論見か、それとも売国奴が一緒に中国の敵を迎え入れようとするサインのどちらかだと解釈できた。いずれにしろ、悪魔の日本人（Jap）が近くに迫ってきていることは確実だった。そして午後1時か2時ごろ、まるで魔法にでもかかったように、通りから声も姿もきれいに消えうせると、死んだように静まり返る中で、私は生涯忘れることのできない光景を目にした。それは勝ち誇った侵略者の入城行進だった。兵士たちの状態はよく、緊迫感はない。行進の歩みはゆっくりで余裕があり、軍服は形崩れていない。彼らは明らかに英国側から何の反撃も受けず九龍に入城したのだ！兵士たちは行軍する中で分かれて、数人が私たちの通りに残った。見ていると、二人が私たちの建物の門のところに、他の二人が別の家の門に、というようにすべての家の門に歩哨が立った。これが12月12日、太平洋戦争勃発後の五日目に起きたことだった。

どこに移動すべきか知恵も尽き果てまさに苦境のさなかにあったとき、息子の以安が急に熱を出した。夜になり、熱が高くなっていく様なので、部屋の中で明かりになるものを見つけようとした。もちろんロウソクが売られているはずもなかったが、私たちのトランクの片隅から誕生日祝いの小さなロウソク二本が見つかった。子供たちが記念にとっておいたものだ。彼らはこの子供らしい思い出の品を宝物とした時、それがこんなにも緊急の必要に答えることになろうとは夢にも思わなかっただろう。私はその小さなロウソクの一本をともし、部屋の隅の椅子の下に置いた。おかげで病気の息子の体温を測り、薬を与

え、息子のベッドを整えることができた。このようにして私は以書とともに、部屋の中では病気の息子を、部屋の外では敵の兵士たちの動向を見守りながら不安な二晩を過ごした。

ここで、1938年に広東が敵の手に落ちたとき降伏を拒否し、英国当局によって香港に拘留された500名の中国人兵士について言及しておかねばならない。英国人と日本人（Japs）の間に戦争が始まるや、香港当局はこの中国人兵士たちを解放し、ライフルや武器を与え、英国軍の第一線に配属して戦わせた。兵士たちは敵に遭遇すると一塊になって前方に突進し、ひとつの戦闘が終わったときには一人残らず戦死していた。彼らは異国の土地にあつてすら、これほどまでに自分の魂を祖国（their country）に捧げる気概を示そうとしたのである。詩人の誰かが、この「勇敢な五百の魂」に不朽の名を与えるべく詩を捧げるべきである。

香港の降伏

12月12日の九龍降伏後、香港に対する日本人（Jap）の攻撃は二週間以上続いた。軍事に関する無知のために私はここでも戦闘状況を描写することはできないが、戦闘のあいだ私たちが体験したことは描写しておくべきだろう。

12月18日に移り住んだ家の裏のちょうど真下に日本人（Jap）が七台から八台の大砲を設置した。そこからの連続砲撃がとても激しかったため、建物全体がしばしば地震が起きたかのように揺れ、そのたびに私たちは座っているところから飛び上がった。ただターゲットはこちらに向けられたものではなかったから怖くはなかった。しかし、香港サイドからの砲撃は、回数は少なかったがもっと恐ろしかった。数日たつと子供たちと私は、音を聞いて砲弾がこちらに飛んでくるか否かを言えるようになった。夜には、輝く光の矢が音を立てながら私たちの窓を横切るのを目にした。英国側の大砲のターゲットのひとつが、私たちの窓の外に設置された敵の大砲あたりであることは、通りの真

向かいの大きな建物の屋根が、誤爆に違いなかったが、砲撃を受けた事実によってわかる。

九龍の陥落から数日後、英国政府のマーク・ヤング卿〔第21代香港総督 Sir Mark Aitchison Young (1886-1974)〕がピストル自殺をし、二、三日後には香港が敵に降伏するといううわさが広まった。続いて香港の人々が空からの爆弾投下によって炎に取り囲まれ地獄のような状況に置かれているという情報が伝わってきた。井戸水以外に水はなく、しかもそういった井戸にはわずかな家を除いては容易にたどり着けないというのである。それから、日本人 (Jap) 管轄下の新聞が、日本人 (Jap) が香港に上陸し、市街戦で優勢にあると伝えた。しかし、私はこれらすべてを信じず、できるだけ希望を持とうとした。

20日の晩、私は、突然、窓の外山の山際に沿って明かりが前進していく光景にひきつけられた。よく目を凝らしてみしてから、それが九龍と香港の間に直線状に横たわる海に向かって進む敵の兵士の集団であると判断した。香港島に夜襲をかけるつもりなのは明らかだ。私は眠っている子供たちを起こし、目が私よりいい子供たちにこの光景を見てもらった。それで私の見たことが裏付けられた。それは敵の兵士たちで、こんなに静かに動くからには草履 (straw sandals) を履いているに違いなかった。兵士の数は少なくとも数百人に上るに違いなかったが、全体の動きが恐ろしく静かなので、私の注意を引きつけた明かりの行列がなければ、兵士の分遣隊が私たちの窓からほんの数百ヤード先を動いていることに気づきもしなかっただろう。私たちは窓のところにじっと立ち、すべての明かりが向こう側の分水嶺に消えるまで、この奇妙な光景を目撃し続けた。

そして、翌日の朝早く、香港に敵の軍隊が上陸しはじめ、英国側と市街戦を繰り返しているという情報が伝わってきた。こういったうわさは日がたつにつれてますます重みをおび、ついに私たちはそれを信じざるを得なくなった。

12月24日と25日は、私たちが英国側と敵の間で最も激しく砲撃戦が

交わされるのを目撃していた日々だといえるだろう。24日の早朝、私たちはいきなり大砲のすさまじい音で目が覚めた。音は九龍側の日本人（Jap）と香港側の英国人の両サイドでたっぷり八時間以上にわたり続いた。私たちは綿で耳をふさぎ、いつものように日常のルーティーンを行った。いずれにしろ砲撃がやむことがなかったからである。しかし、午後1時に砲撃音はいきなり止み、暗くなるまで再開されなかった。

このわずかな休止の間に、これは後に知ったことだが、敵は香港側の英国指揮官に香数降伏の条件を交渉させるべく士官数名を送り込んでいた。けれども、それが何であれ、結局条件は拒否され、それまで以上に激しい砲撃が始まった。この激しい戦闘は翌朝、実際に香港が降伏するまで続いた。

私たちの家の一階にすんでいた住民は敵に友好的だった。私たちはすぐに、主人とその妻が日本人と同じレベルで日本語を話せることを知った。すべての夜の中でもっともひどい夜、それはクリスマスイブでもあったのだが、人間の心を悲しい自暴自棄から解放しがたいためか、まるで悲劇の幕間の余興のように、その「裏切り者」——私たちは敵に友好的なその男をこう呼んでいたのだが——は敵の将校たちのためにパーティーを催したのである。男の妻の声の耳障りな甲高さ、下品な哄笑、そして二人の騒々しい話し方すべてが、主人とその妻二人のおべっかを使う様をありありと示していた。同胞の輩（Fellow-creature）のこういった恥ずべき行為に私は顔から火が出る思いだった。突然、この恥ずべき者たちの顔をみてやりたいという荒々しい欲望がわきあがったが、それは不可能だった。私はベッドから起き上がると心の慰めになる何かを探した。

するとまあ驚いたことに、「主人のすることに召使は従う」と中国語の諺^{ことわざ}にあるように、一階の女中が主人の例に倣っている。裏庭の私の窓の真下の、ちょうど敵が大砲を備え付けた土手の前で、女中たちが、土手の脇に臨時のかまどを作っていた兵士たちと楽しげに騒いで

いたのだ。兵士たちはその晩たっぷり腹に詰め込んだのだろう、豚の皮や骨を下のほうにいる女中たちに放っている。どちらも笑っており、大いに浮かれていた。そこで私は思ったものだ。裏庭の征服者と被征服者のほうが表の客間のそれよりも平等というわけだと。

砲撃は夜遅くまで続いたが、夜明けにすべての音がはたと止まった。私たちはベッドからおりたとき、互いに顔を見合った。というのは、朝のトイレを済ませるとき砲弾の方角を聞き分けることも、また洗顔の際、今にもこの顔が木っ端微塵に吹き飛ばされるかもしれないと考える必要もなかったからである。

そして砲撃は再開しなかった。香港はクリスマスの朝5時に事実上降伏したのである。そして、マーク・ヤング卿は自殺しなかった。

その朝の私たちの感情は安堵と絶望に引き裂かれていた。絶望は、香港が沈み込んだ深い穴を思っただけであり、安堵はこの悲惨な戦争の一時停止によってである。この戦闘が続いたこの数週間に起こったすべての中で何よりも驚くべきことは、英国側からの激しい砲撃の中でも、敵が通りのあちこちに置いた火薬が、一面に飛び交う火の粉によって引火しなかったことである。火薬の爆発はいとも簡単に九龍の町全体を炎の地獄に変え得たはずである。

余波

香港での戦争の余波は当然ながら、実際の戦闘そのものより一層ある種の苦しみを引きのばした。その苦しみを私たちは背後に置き去ったが、それは疑いなくまだ存在している。長く複雑な話を手短にするために、ランドマークのように際立ったいくつかのポイントに絞って話そうと思う。

まずは、香港で日本人（Jap）が特に彼らだけを敵として憎悪した英国とアメリカの国民（nationals）の運命についてである。先に既に言及したように、英国人と米国人は、戦争の早い時期に九龍から避難していた。彼らは同郷人と一緒に香港のヴィクトリア・ピーク、すな

わち植民地の高級住宅街に宿泊を割り当てられた。香港が降伏するとこの居住区のほぼすべての住民が日本人（Jap）の捕虜となり、同盟国の兵士と同じように、収容所に収容された。私たちは、九龍の通りでこういった「捕虜」を満載したたくさんのトラックを目にし、彼らに同情した。私たちの運命が彼らよりいいとはお世辞にも言えなかったが。彼らはやせこけ青白い顔をし、もつれた髪が額に垂れ下がっていた。着ているものはぼろぼろだった。埃と汗にまみれたその顔には怒りと悲しみが相半ばし、飢えと渇きが目に浮かんでいた。そのさまは、かつてこの地の領主であり主人であった白人というよりは、飢えた香港の現地の人に近かった。ほとんどのヒンドゥー人（Hindu）の兵士と警官は敵方に寝返っていたので、「捕虜」たちは収容所から収容所へと移動する際に、日本人（Jap）とヒンドゥー人の警官に護送された。こういった以前使われる側だった人種（subjective races）の傲慢さは、私たち傍観者にすぎないものにとっても耐え難いものだった。以前の使用人たちから命令される「捕虜たち」が感じたに違いないその激しい苦悩、憤り、恥辱は、想像に難くない。

二番目に述べたいのは、香港と九龍の英国側要塞についてである。これらの要塞は、実によく設計されていたといえる。山中深くに隠され非常にうまくカモフラージュされていたので、その秘密の場所に案内されなければいずれも見つけられなかったはずである。わたしは香港降伏の合意文書を手に入れないでいるので、こういった要塞を無傷のまま日本人（Jap）に引き渡すべきとの合意があったのかわからないが、敵が、香港降伏後に、この渴望していた軍事的褒美を首尾よく手中にしたことを知っている。軍用車やトラックが英国製であることが、この目で見た何よりの証拠である。

三番目に言及すべきは日本人（Jap）による略奪である。この行為においても彼らは英国・米国ともう一方の「第三国民」との間で区別しているようである。前者に対してはまったく遠慮会釈せず、何でもすべて取り去り、取れないものは粉々に破壊した。後者からは彼ら

が必要とするもの、通常は缶詰の食品や金銭、煙草といった小さなものだけを取った。

四番目に、香港と九龍にいる我々すべてを飢えさせようとする敵の目論見について述べなければならない。この目論見が計画されたものらしいことは、日本人（Jap）の兵士が親しくなった中国のクーリーに漏らした次のような言葉からわかる。香港が陥落した時、敵の兵士たちは休暇が与えられると信じていたが、しかし、そうはならなかった。彼らは、更なる戦闘のためにシンガポールに向かう船に乗るよう命じられたのである。香港を出発する際、一人の兵士が中国人の友に「はっきり言って、お前たちの運命は飢えだが俺たちの前にあるのは死だ。お前たちと俺たちは同じ舟に乗っているのさ」と言ったのである。これは中国側に強いた飢餓の状況を敵が理解していることを説明しているだけでなく、敵の全てとは言わないまでも一部の兵士たちがどれだけ戦争に疲れているかをも示している。

敵が香港と九龍の中国人の一部を飢餓状態にすることに成功したのは確かである。餓死した死体が九龍の通りの隅に横たわっているのをこの目で見ています。飢餓をもたらすことに失敗した地区では、香港、九龍ともに、社会的階層を以前のレベルからひとつか二つさげること、人口を減少させることに成功している。つまり、乞食たちはほとんどが飢え死にし、その階層はいまや車引きやその他日雇い労働者に取って代わられ、車引きや日雇い労働は従来の「ホワイトカラー」のサラリーマンによって補充され、といった具合である。

ところが、死体ですら征服者には問題と費用を引き起こした。それで彼らは、香港と九龍の両地域で戦闘がおさまるや否や中国人に出て行くよう促した。それでこれが私の五番目のトピック、悲しみに打ちひしがれた人々の現代版大移動（modern exodus）である。人々が向かうのが陥落した地域か或いは国民党統治区（Free China）かは、敵は気にかけなかった。人々のうち中国に忠誠を置く者について、疑わしいと見られた者は出発を禁じられた。この理由から、香港と九龍を

去ることを許された難民はクーリーの階層ということになる。彼らに対しては、敵方は、教育を受けた人々ほど恐れも嫉妬も抱かなかったからである。原則として、検査官は難民の手を調べて、その階層を判別することになっていた。けれども多くの文化人がこのテストを逃れ、その後国民党統治区へとたどり着くことになったことから、私は、敵方がひどく無能であったか、あるいは食物と棺を確保するために、目をつぶったかのどちらかではないかと思っている。

戦闘がいったん停止した12月末から、4月末の夫の電報（最後に打ったものから数えて五番目だが、最後に受け取ったものから数えて最初）を受け取り、私たちが香港を去る準備を始めるときまで、まるまる四ヶ月あったが、私はこの機会を無駄にせず、私の小さな部屋と同じく頭の中が整理されているように努めた。子供たちと私は、日常的に起こりえた敵の妨害のために中身がぐちゃぐちゃになっていたスーツケースをもう一度整理した。そしてトランクの中に小さな花瓶を見つけ、すぐに何本かの花を生けると狭い部屋が生き生きし、何よりの慰めとなった。私は子供たちの勉強のスケジュールを新たに組み、より系統的に教えた。ただし、晩の楽しいおしゃべりの時間は決してやめなかった。電気が再び回復してもである。香港での戦争の最中にとった記録についてだが、私は今もういちど整理しなおし、空白だった箇所を埋めることができた。ただすべてを語ることはまだ危険だった。ともかく、暮らしの中の小さな楽しみが幾分復活し、日常の義務を果たすなかで、私はある程度普段の生活を取り戻しつつある。

しかし、このような経験を経た後では人生は決して同じ意味を持ちえない。例えば、哲学の探求だが、中国の知識人の生活において歴史上初めて哲学が宗教の地位に取って代わることとなった。古代の賢人は従来私の理性に訴えかけ、心を照らしてくれたものだった。ところがいま、物質的かつ精神的なあらゆる危機を経た後では、それは私の心に直接語りかけるようになり、外部と内部から人生（生活）を悩ます不利益な力をリセットしてくれる。以下の詩は、原文は中国語で書

かれているが、この点を説明するものでもあるし、また香港の戦争記録を総括するものでもある。

私の魂から枷がふるい落とされるにつれて
私は再び喜びにあふれ自由となる。
古の賢人よ、あなたこそ不幸を
解放へ変える術を私に教えてくれた。
あなたへこそ私は感謝を捧げよう。

ただし、ここで言う「解放」という言葉は、精神面にのみ当てはまることを付け加えておこう。攻撃的な侵略者に鎖で縛られた過半数に上る国民の解放がいつになるかは、まったく別のことである。そうは言っても、国民の解放は、鎖につながれた精神からは決してもたらされはしない。自由な肉体に宿る自由な精神とともに私たちは中国全土を解放すべきなのである。

以上が“I Saw War in Hongkong”全文の拙訳である。

陳衡哲らが香港を脱出して重慶にいた任鴻雋と合流するまでについてた。先に挙げた程靖宇「敬懷莎菲女士陳衡哲教授」⁽¹⁷⁾で母子脱出の経緯の一部が紹介されている。程氏は、1942年に重慶で陳衡哲一家と出会ったとき、それを陳本人の口から直接聞いたという。

程氏によると、陳衡哲等は、日本軍が香港占領後、治安がやや安定したとき、フランス租借地の「広州湾」（現在の広東省湛江市）に向かうフランス汽船会社の乗船券を手に入れることができた。そして二人の子供と一緒にフランス国旗の掲げられたその船に乗ったところ、船上で日本の憲兵に見つかってしまう。日本側は中国の要人の名簿を入手しており、陳衡哲もリストに上がっていたということのようである。彼女は日本憲兵から、まず上海に戻り、そして北方に行って教え

るようにと要求される。そこで陳衡哲は当初中国語を使わず英語で自分は陳衡哲でも「任鴻雋夫人」でもないと言い張ったが、憲兵側は英語の堪能な中国人を連れてきて通訳させようとしたため、これまでと見た彼女は開き直り毅然とした態度で「私が陳衡哲だとしても、私が今いるのはフランスの船の上です。あなた方には私がどこに行こうが干渉する権利はありません。はっきりいいますが、私は広州湾に行きます」と突っぱねたという。国際法では、国交があり敵国ではない船の上で逮捕はできない。まして彼女は犯罪人でもない。日本の憲兵は手の出しようがなく、引き下がり、こうして彼女と二人の子供は香港の鯉魚門を出ることができた。そして広州湾から上陸して、商務印書館の出迎えを受けた後、先に到着していた陳寅恪らと共に雷州半島を徒歩で縦断し、さらに江西省、貴州省を通して四川省に入り、夫の任鴻雋の待つ重慶にたどり着くことになった、というわけである。

あっぱれ陳衡哲、だが、それにしても、中国の知識人にこのような「あっぱれ」な行動をさせた日本軍侵略の歴史を、私たちは知る責任がある。

注

- (1) 書簡については凡例八に掲げた⑨、⑰、及び沈雲龍輯註「胡適與任鴻雋陳衡哲来往書信」(台湾『傳記文學』第24卷第2期—第6期、1974年2月—6月)に一部が収録されている。胡適宛の書簡で言及のある「一個女尼的懺悔」と「桃花和晚霞」(題名のみ)については、陳衡哲自身が『努力週報』に掲載を打診していることから、作品とみなし目録に収録した。その他 *The Chinese Students' Monthly* 掲載の「Vassar 近況報告」は幹事宛て公問書簡であるが散文といえなくもないので目録に収めた。
- (2) 『留美学生季報』は今日、上海図書館蔵「中国近代報刊原文影像数据库」ではほぼ確認できるが、日本国内でこのデータベースを導入した研究機関はまだなく、日本での全面的な閲覧は今のところできない。
- (3) 今回参照したのは *The Chinese Students' Monthly* (1906-1931) のう

ち主に陳衡哲の米国留学時期と重なる1914年から1920年まで。*The Chinese Students' Monthly* は1905年に結成された The Chinese Students' Alliance of the Eastern States の機関紙として始まり、当初の名称は *The Chinese Students' Bulletin*。1907年11月号（第3巻第1号）よりこの名称。1911年に顧維鈞がいくつかの地域に分かれていた学生会を統一した後は全米規模の留米中国学生雑誌となる。

（4）注1参照。

（5）陳「陳衡哲略伝」（注11参照）によると、陳衡哲は太平洋（国際）学会の中国理事会（Chinese council）〔中国訳の名称が正確か否かは検討が必要という訳者の注がついている〕代表として、それぞれ1927年ハワイのホノルル、1929年日本の京都、1931年中国杭州、1933年カナダのバンフで開催された会議に出席し、うち、1929年の学会期間中に中国側が論文集出版を企画、その編集に陳衡哲が当たったという。この論文集 *Symposium on Chinese Culture* の邦訳『支那文化論叢』（石田幹之助監訳、東京：生活社、1932年）に付された「譯本監修者辨言」では以下のように説明されている。「茲に譯出せられた「支那文化論叢」は、原名を *Symposium on Chinese Culture* と云ひ、太平洋問題調査會（Institute of Pacific Relations, 略称 I.P.R.）の支那支部が陳衡哲女史に編輯を嘱し、女史の努力によって支那の學界に於ける第一流の人士の寄稿を集め、之を一巻として世に送ったものであって支那文化の概観乃至一種の學術史として好個の入門書であることは夙に定評の存する所である。……」。

『支那文化論叢』だが、参考のために以下に目次をあげておく。

訳本監修者辨言

凡例

原序 陳立廷（太平洋問題調査會支那支部會主事）〔小野忍訳〕

例言 陳衡哲〔小野忍訳〕

一 支那は如何にしてその文明を獲得したか

…………… 丁文江述、小野忍譯

二 支那史上に於ける宗教と哲学 …………… 胡適述、福井康順譯

三 文芸の再生 …………… 胡適述 原三七譯

四 劇 …………… 余上沅述 原三七譯

五 畫と書 …………… 蔡元培述 石田幹之助

六 建築—特に北平の變遷に就いて

.....	朱啓鈴・葉公超述	竹島卓一譯
七 音楽	趙元任述	岸邊成雄譯
八 考古學	李濟述	駒井和愛譯
九 科學	任鴻雋述	上野實朗譯
十 地質學	翁文灝述	赤堀英三譯
十一 古生物學	グレーボー述	赤堀英三譯
十二 生物學	秉志・胡先周驢述	上野實朗譯
十三 教育	朱經農述	竹内好譯
十四 支那の婦人	曾寶蓀述	竹内好譯
十五 社会上の變化	陶孟和述	安藤次郎譯
十六 農業	馬銳述	仙波泰雄譯
十七 産業	何廉述	増井經夫譯
十八 品文化問題の要約	陳衡哲述	岡崎三郎譯

以上。

尚、英文の原著は未見である。

- (6) 英文で書かれた原作はシカゴ大学所蔵。陳衡哲が寄贈したもので、著者名はCHEN NAN-HUA。序の最後にPeiping, China September, 1935と記されている。中国語版は、馮進訳『陳衡哲早年自伝 中国第一位官派留美女生』（安徽教育出版社、2006年）。この自伝の翻訳に関して史建国論文（凡例八^⑩参照）で修正すべき事実関係がいくつか指摘されている。
- (7) 前掲注3参照。
- (8) 「『彼女たち』の近代・『彼女たち』のことば その2 陳衡哲 3」として『慶應義塾大学日吉紀要 中国研究』第3号（2010）、第4号（2011）、第7号（2014）に掲載したもの。この三本の拙論は資料収集と同時に論考を進めた甚だ不完全なものであり、今後折を見て加筆修正を行うつもりである。
- (9) 中国語の伝記としては凡例八^⑩に挙げた史建国『陳衡哲伝』が目下唯一の全面的な伝記である。ただし、日中戦争時期から晩年にかけてはやはり資料の不足により簡単な記述になっている。筆者は拙論（注7）を書いた時迂闊にもこの伝記を見落としていた。今回目録修正では、この伝記に依る1947年「我們要的是和平」を加筆した。
- (10) 「自伝」『出版界』第2巻第1期（1945年）。のち『婦女新運』第7巻第9期（1945年11月）転載。

- (11) 『中国現代文学研究叢刊』（1990年代4期）掲載。これは *Biographical Dictionary of Republican China*, Columbia university press, 1967, pp. 183-187. 掲載の「Ch'en Heng-che 陳衡哲 Sophia H. Chen Zen」の項を陳衡哲の実妹、陳鷄（1909-？ 数学者）が補足修正して中国語訳したもの。
- (12) 史建国「『陳衡哲年表』正誤」（凡例八⑩）による指摘。
- (13) 前掲注9 参照。
- (14) 台湾『傳記文學』第34巻第6期（1979年6月）、第35巻第1期（1979年7月）、第35巻第2期（1979年8月）、第35巻第3期（1979年9月）に連載。程靖宇は陳衡哲と同郷の湖南省衡南出身。今聖歎というペンネームで1948年より香港で文筆活動を行っていた。陳衡哲夫婦と家族ぐるみのつきあいをしていたようである。
- (15) *Vassar Alumni Magazine*, (April 15, 1944): 4-8. Special Collections, Vassar College Libraries. 所蔵。
- (16) 比較的入手しやすい著作として以下のものを挙げておく。このうち、茅盾、張愛玲のものは、陳衡哲がいた九龍の向かい側の香港島の状況を描いている。
- 茅盾「劫後拾遺」（小野忍・丸山昇訳「香港陥落」、小野忍編『抗戦期文学Ⅱ』平凡社、1972年 所収）、「脱險雜記」（小川環樹訳「ホンコン脱出記」中国文学選書、弘道館、1954年 所収）
- 張愛玲「燼余録」〔清水賢一郎訳「香港——焼け跡の街」、藤井省三監修『発見と冒険の中国文学⑨浪漫都市物語』（JICC 出版局、1991年）所収〕
- 関禮雄『日佔時期的香港』香港三聯書店、1993年（林道夫訳『日本占領下の香港』御茶ノ水書房、1995年）
- 小林英夫・柴田善雅『日本軍政下の香港』社会評論社、1996年。
- 謝永光著・森幹夫訳『日本軍は香港で何をしたか』社会評論社、1993年。
- 薩空了『香港淪陷日記』北京：生活・読書・新知三聯書店再版、1985年。
- 顏惠慶原著・姚崧齡訳『顏惠慶自傳』台北：傳記文學出版社、1973年。
- (17) 前掲注9。